

令和6年度 自己評価表(中間評価)

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	1 主体的学習者の育成 2 21世紀をリードする人材の育成	今年度の重点目標	1 学校の魅力化・特色化の推進・発信と中高連携の強化 2 定時制教育のさらなる充実 3 生徒支援の充実と業務改善の取組
-------------------	----------------------------------	----------	---

○評価基準 A 80%以上(概ね達成) B 60～80%(一定の成果がある) C 40～60%(さらなる努力が必要) D 40%以下(現状が改善されていない)

【全日制課程】

年度当初					評価結果(9)月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
学校の魅力化・特色化の推進	国際バカロレア(IB)教育の実施 (グローバル人材育成重点校) GP2・CP1	・生徒と教員が共に初めて取り組むプログラムであるため不安もある中で、IB生の一期生のDP授業が始まった。生徒たちは前向きに学びに取り組んでいる。 ・二期生については、選考時期を早める改善を行いつつあり、適切な進路選択とブレIBを通じたIBの学び方の定着が一層求められている。 ・一期生のために数年前にワークショップに参加し、先進校視察や研修を通じて準備してきた教員が一期生の指導にあたっているが、2025年度からはその教員以外の教員もIBの授業を担当することになるため、2024年度からの準備が必要である。	・生徒アンケートを実施し、80%以上の生徒がATL各スキルについて意識して習得し活用しようとしている。 ・生徒アンケートを実施し、80%以上の生徒がコア科目の学習意義を理解し前向きに取り組んでいる。 ・探究型学習の展開における図書館の有効活用を検証し、来館者数と貸出冊数の2つの積が1000を超える日が開館日の半分以上となっている。 ・2025年度に向けた指導体制を構築できている。	・生徒が各スキルをバランスよく身につけるためにも、教科担当者によるM&Iの中で協議し教科横断的に進める。様々な問題が生じた際に生徒が取得したスキルを活用して自身で問題を解決できるよう、伴走者としての教師の役割を確認する。 ・CAS(創造性・活動・奉仕)・EE(課題論文)の各コーディネーターは、指導担当教員やアドバイザーと協働し推進する。TOK教師は、様々な科目の教師と一緒に授業が行えるように時間割を工夫する。 ・策定した図書館の方針について、ウェブサイトに加えて新入生のしおりや学校要覧等で概要を公表し、図書館活用の周知を進める。 ・ワークショップ参加や研修会参加を通じて、教員のDPの学びへの理解を深める授業準備を促進し、DPが指導できる教員を増やす。	・EEは定期的な指導教員の打ち合わせを実施しており、CASは不定期に実施している。EEは、指導教員だけでなく、DP教科の担当教員と生徒との連携を図った。CASは校内ワークショップを実施し、校内での教職員の理解の促進に努めた。 ・ブレIBを始めているが、担当教員はレギュラー一生に対応する一方で、DPの授業準備まで取り組める余裕がないことなどに苦慮しており、DPIに対する不安を解消する支援が十分にはできていない。 ・図書館の指標については、7月末時点で開館日61日に対して目標を上回った日は約20%であった。6月は上回った日が0日であり、貸出冊数が少なかったが来館者数は多かった。7月は、教科が本を借りて夏休みに読むという指導を行ったため、指標を上回る日が多かった。 ・進路指導については、情報提供や支援体制が確立されていない。	C	・11月の校内研修会のテーマはEEとし、講師を決定した。 ・全校的に教師の役割として教師が生徒に伴走するスキルの育成やマインドセットが必要である。「問い」を投げかけることにより生徒が深掘りをする指導を、研修や会議等で提案していく。 ・ブレIB担当の先生が先進校視察に派遣できるようにし、先進校での授業見学を通じて、IBの授業のイメージを把握できるようにする。 ・図書館の目標が挑戦的な目標であることが分かったため、来年度に向けて適切な目標を検討する。秋の行事にあわせて、図書館利用促進の活動や図書委員会の活動を計画している。 ・後期から海外大学、国内大学を問わずキャリア形成の支援体制を確立し、実践する。
	生徒主体の探究活動の実践 (探究活動重点校) GP5・CP2	令和5年度は活動の自由度を高め、各教科の探究的な学び、キャリア教育とのつながりを教職員に求めたが、学校全体の生徒の自律的・自主的な学びにつなげる点で十分ではなかった。一部ではあるが積極的に活動にのぞんだ生徒は、地域の課題に対して提言したり、他校や他団体との協働を深めることができた。また、模擬国連や県主催のスタンフォード大学の授業参加等によって、国際的な視野を広げることができた。 【学校評価アンケート】 探究活動に意義を感じる 77%	・探究的な学びの実践・学びの個別最適化に向けて、生徒の学習習慣、キャリア形成意識が適切に変容している。 ・総合的な探究の時間に加え、各教科でも探究的な学びの導入が促進され、シラバス記載のPBLが実施されている。 ・校内にとどまらず、地域や企業と連携した探究的な学びが展開されている。 【学校評価アンケート】 探究活動に意義を感じる 90%以上	・生徒の意思決定力・しなやかさを身につける機会を提供し、学習習慣・キャリア形成意識の変容を促す。 ・探究学習において関係部署(教科:指導や助言・学年団:運営や進捗状況確認・分掌:外部連携など)との連携を強化し、支援する。 ・学習アプリなどICTの活用による、自習時間や非常時の学習活動の充実と学びの個別最適化をはかる。 ・シラバス記載のPBL実践と振返りによる修正機会を保障し、授業改善と生徒の学習習慣の変容を促す。 ・関係部署・地域・企業などと連携して学校行事を綿密に計画・立案し実施する。	・小田急電鉄主催のIFLATs倉吉市事業と協働しながら16のスキル(意思決定力・感情コントロール力・共感力など)を身につけ、測定をする活動を8月下旬から始動した。 ・英数探究、グローバルアスリートでは外部講師を招聘などして数学力や英語力の育成につなげている。 ・個別最適化に向けてスタサブの利用状況が共有されておらず、効果がわかりづらく不十分である。 ・日頃の授業において探究的な学びの推進が十分できているとは言い難く、相互の授業参観などが更に実施されなければならない状況にある。	B	・iFLATsと倉吉市との共同事業は9月より本格的に稼働している。これらの活動を通して、探究活動が生徒自身のキャリア形成へつなげるプログラムになりつつあるので、適宜、振り返りを活かした修正を加えていく。 ・外部講師の招聘により高揚した意識と向上した知識を、今後どのように生徒の個別探究につなげていくか、面談を実施する必要がある。 ・スタサブについては、到達度テストを含め、活用状況や効果の検証を行う。 ・探究的な学びについては、スクールミッションの達成に向けて各分掌・各教科で推進する必要がある。あらゆる学びの場面で「振返り」の機会と時間を確保する。
	IB教育の理念を生かした授業改善と評価 (探究活動重点校) GP1・CP1	学習指導要領に対応した授業シラバスを作成し、探究活動先進校(立命館宇治)および進学先進校(灘高等学校)の先生にアドバイスをもらい高評価を得た。しかし、シラバス通りに進められていない授業もあり、また、授業アンケート実施が不十分であるなど、全体として授業改善に取り組めていない。 【学校評価アンケート】 授業に満足している 81% ICTを活用した授業は学力を効果的に伸ばしている 89%	・学習指導要領とIB系の教育課程を充実させ、教科横断的な学びを通して学力の向上を図る。 ・総合的な探究の時間・LHR・学校行事等の充実を図る。 ・生徒の能力や特性、置かれている状況を考慮して生徒が学び続けられる環境や機会を確保する。 【学校評価アンケート】 授業に満足している 90%以上 ICTを活用した授業は学力を効果的に伸ばしている 90%以上	・学校運営委員会と連携して教育課程を検証し改善する。 ・IBワークショップや情報端末研修と連携して研究授業等を実施し、授業改善に努める。 ・共同運営部およびIB部と連携して学校行事を綿密に計画・立案し実施する。 ・自習時間は振替により減らし、非常時には配信授業等で対応することで授業時間を確保する。 ・シラバスの配信や学習アプリを有効活用するなどして各生徒に個別最適化された学びを促す。 ・授業アンケート等の内容を振り返り、適切な学習習慣が確立できるように努める。	・教育課程および学習班編成について改善を検討している。 ・IB部と連携を図り、IB教職員研修会を実施した。5月に相互授業参観を実施し、10月の学びウィークでは概念学習とICT活用をテーマに研究授業を予定している。 ・各分掌と連携して学校行事やLHRや探究活動を計画・立案し実施している。 ・自習の振替や教科内で代行する対応を進めている。 ・生徒に全科目のシラバス(評価規準あり)を配信した。それに連携させた学習アプリについては有効活用ができていない。 ・前期授業アンケートでは、「授業の理解」については大幅に増加したが、「計画的な学習」が低い傾向にある。	C	・研修の内容を活かした研究授業を実施し、相互の授業参観を促す。 ・2月中旬の年度末反省をもとに年度末の学校行事の計画を早期に検討する。 ・学習サプリの有効活用について各教科と検討し、生徒にその方法を提供する。 ・前期授業アンケートの結果を検討し授業改善につなげるとともに、後期の授業アンケートの集計を早める。
	学力向上による進路目標の実現 GP5・CP3	・東大会や医学会等での取り組みや進路学習を通して自らのキャリア形成について考える機会としている。 ・主体的な学習者の育成に向け、学年、教科、分掌で連携して取り組んでいるが、基礎学力の定着が不十分な生徒もあり、進路目標を下げざるを得ない生徒もいる。 ・大学合格者数が学校目標(東京大学を含む超難関大学合格者数5名以上、難関大学合格者数20名以上、中堅大学合格者数50名以上)に達しておらず、特に上位層の育成が十分とはいえない。	・様々な観点から自らのキャリア形成に適した進路目標を設定し、その実現に向け計画的、主体的に学習に取り組み、自己の進路目標を実現できる学力を身につけている。 ・高い目標を持ちながら学習活動に意欲的に取り組むことで進路実現を果たし、その結果大学合格者数が学校目標に到達している。 【学校評価アンケート】 倉吉東高の進路指導は充実している 90%以上	・講演会や進路学習等を更に充実させ、キャリア形成を考える機会とする。 ・学年、教科、分掌と連携し、面談や探究学習等を通して、生徒が主体的に学習に取り組む態度を育てる。 ・進路検討会や学年会を通して適切な進路目標を検討し、進路指導体制を充実させる。進路指導テストや校外模試等を利用して到達度を計り、進路実現に向けて学習活動の更なる充実を図る。	・進路学習や進路講演会、今年度から実施している首都圏研修やアントレプレナー講演会などを通して、生徒が自らのキャリアについて深く考えることができています。 ・長期休業明けなど定期的に担任面談を行い、学習状況を把握したり、進路目標について話し合う機会としている。 ・3年生の進路検討会や各学年会で進路情報を共有したり、進路指導テストや校外模試の結果を分析し、学習活動の振り返りや改善に役立てている。上位層の育成や下位層への手立ての更なる充実が必要である。	B	・今後も様々な活動を通して主体的に学ぶ態度を育成し、キャリア形成について深く考える機会を設ける。 ・学年団と密に連携をとり計画的に進路学習や進路指導を行う。生徒の今後のキャリア形成や特色入試を視野に入れた指導を行う。 ・生徒個々に適切な進路目標を設定させ、目標に向けた具体的な方策を練る。
	国際交流の充実と語学力の向上 (グローバル人材育成重点校) GP3・CP4	・韓国、台湾、シンガポール、フィリピンの各交流校とオンラインで意見交換を行った。また、10月の桃園高校来校では、生徒交流を行い、台湾の高校生に鳥取県中部の魅力伝えることができるなど、英語力向上と、異文化理解の機会につなげることができた。 ・本校の実施する国際交流等の取組に生徒が積極的に参加するようになり、グローバル人材育成の事業が軌道に乗り始めた感がある一方で、参加する生徒に偏りがあることが課題である。 ・英語による発表に注力してきたが、交流を進める上では、「やり取り」や「ディベート」などの指導の充実が必要である。	・多様な文化を理解し、他者に対する敬意と思いやりをもち、主体的に行動できている。 ・グローバルリーダーとして、地域貢献・国際貢献につながる学びを行っている。 ・主体的な国際交流活動(海外研修旅行を除く)参加者数、のべ100名。 ・CEFR:B2(英検準1級)レベル5名以上・B1(英検2級)レベル80名以上→B1レベル以上の生徒総数400名	・模擬国連(ハーバード方式)を生徒主体で運営していき、議会運営能力や国際的感覚を高めていく。 ・海外交流校の来校や桃園高級中学訪問など、交流の場面で「おもてなしの心」を涵養し、異文化理解を深める。 ・英検の他、IELTS、TOEFL等の語学検定の受検を積極的に勧め、受検者数・合格者数の検証を行う。 ・英語の「やり取り」に関する教職員研修会を実施するとともに、授業における英語のやり取り等を適切に実施する。	・模擬国連は生徒のリーダーが安養高校やセントジョセフ高校の参加生徒とやりとりをしながら運営し、コミュニケーションスキルを高めることができた。 ・Dr.T EnglishCampにも定員10名のところ本校から12名自発的に手を挙げて参加した。また、グローバルリーダーズキャンパスには過去最多の6名が参加するなど生徒は様々なイベントに参加している。 ・英検受験者数は第1回・第2回を合わせて168名で昨年度よりも増加したが、第2回の申込者数はやや減少した。準1級の校内合格者数は7名で目標を超えた。 ・IELTSはDP生を中心に受検し始めている。	B	・1年次生のチーミングを開始し、1月の英語による模擬国連に2年次生チームとともに派遣できるよう動めている。 ・県教委や一般団体のイベントを活用した進路指導面談がクラス担任レベルでできるよう、教職員への周知を徹底する。 ・海外進学の進路指導体制の構築とともに、IELTSなど英検以外の語学資格検定を奨励・支援する体制を構築する。 ・英語授業でProgram Based Learningを取り入れ、speakingやwritingの発信型技能を高め、生徒の英語学習への動機を高める。

学校の諸活動の推進・発信と中高連携の強化	自己肯定感の向上につながる学校行事・部活動の実践GP4	・部活動改廃規定によって今年度から募集停止・廃部の対象となる部活動が出たが、全校生徒のほとんどが何らかの部活動に所属して活動している(R6春で約82%)。 ・生徒会部主催の学校行事の企画運営にも多くの生徒が積極的に参画するなど、生徒と学校全体の関わりも増している。「学校評価アンケート(生徒)」では、部活動に対して令和5年度は90%(R4:91%)で、肯定的な評価を得ている。 ・各種中国大会をはじめとして、全国高校総体、全国高総文祭など、運動部・文化部とともに成果を上げている。	・授業や学校行事と異なり、部活動が生徒の自己表現の場として、また、主体性や自律性を育む場となっている。 ・生徒会行事全般により生徒の関与の度合いを高め、生徒会活動や学校行事に対する「学校評価アンケート」での生徒の肯定的回答が90%を超えている。 【学校評価アンケート】 部活動は充実している 肯定的回答が90%以上	・部活動全般が活性化するように、顧問や部の要望をヒアリングしながら部費やその他助成金が効果的に配分されるようにする。 ・行事実施にあたり、生徒会事務局と前もって準備を進めていくことを徹底する。あわせて外部施設や外部機関との連携を密にしていく。 ・自己の成長が感じられるよう、生徒会活動・学校行事・部活動ごとに、失敗を恐れず挑戦することの大切さを伝える。	・多くの部が県総体等で3年生部員が引退したが、新体制に移行し継続して活発な活動をしている。また、人事異動等により顧問に変更のあった部も新たに外部指導者等を迎えるなど、指導の充実を図っているところである。 ・昨年に引き続き、生徒の声を学校に反映させるように生徒会行事には企画段階から可能な限り生徒会事務局メンバーに関わってもらっている。	B	・今後も各部活動の活動状況や要望等の把握に努める。また、高価備品等の購入希望に関して、過年度の執行状況を考慮し、公平な配分を期す。 ・行事の始動を早めることで、生徒が企画検討する期間を確保する。前期生徒会事務局の活動の流れを後期生徒会事務局に活かすために、前期のメンバーの残留を働きかける。
	育友会・同窓会・地域との連携	・育友会においてはコロナ禍前の取組が予定通りできるようになっている。総会も4年ぶりに集会形式での実施となり、参加者も多かった。役員の方々は大変積極的であるが、会員全体の盛り上がりには欠ける部分がある。 ・同窓会においては総会を開催し、5年ぶりに懇親会も実施することができた。各支部の取組も予定通り実施している。	・育友会においては、保護者と教職員が一体となって、生徒を学習面、生活面から支援することができている。総会において300名の参加人数を目標とする。 ・同窓会においては、会員相互の親善を図り、各自の向上発展に寄与し、母校との連携が密になっている。総会・懇親会での参加者を150名とする。	・役員との連携を十分にとりながら、活動を活性化させる。 ・国際バカロレア(IB)教育などの取組についての周知に努め、育友会及び同窓会会員の理解を深める。	・育友会総会では243人の参加があり、保護者の学校教育に対する関心の高さを感じたが、目標人数には届かなかった。懇親会を5年ぶりに開催し大変に盛会となった。 ・同窓会総会では5年ぶりに主幹学年の参加があり昨年度より約20名多い70名の参加となったが、目標人数を下回った。懇親会では主幹学年の企画運営により盛会となった。 ・育友会、同窓会の各事業において、国際バカロレア(IB)教育の現状報告を行っている。	B	・育友会総会は昨年とほぼ同数の参加であるが、少しでも多くの保護者に今後の研修会等の行事に来ていただくための手立てを考える。 ・同窓会は各支部での事業が活発になりつつあるので継続した取組を行い、総会の参加増につなげたい。
	学校に関する情報の発信と中高連携の充実	・学校・育友会ホームページや倉東日より等広報誌によって本校の教育活動についてリアルタイムな情報発信ができており、記事数もかなり多い。SNS(Instagram)のフォローも増え続けている。 ・中学での高校説明会、体験入学では本校の紹介を工夫しながら丁寧に伝えることができています。	・本校ホームページがより魅力的なものとなり、情報発信力が向上している。SNSにおいてもリアルタイムな情報発信ができています。 ・HP閲覧数、SNSフォロワー数がさらに増える。年度末フォロワー数を2100名にする。 ・中学生に本校の特色や魅力が伝わり、志望する生徒が増える。中学生体験入学の参加数目標を320人とし、入試倍率を1.0以上にする。	・本校の教育活動に係るリアルタイムな情報発信に努める。 ・育友会広報委員会と連携し、保護者の本校教育活動への一層の理解と支援を促進する。 ・中学生体験入学や高校説明会の内容を充実させ、本校の取組を中学生に分かりやすく広報する。IBについての周知を図る。 ・新しい取組として、中学生とその保護者対象の授業公開を育友会総会日の午前に設ける。	・HPでは最新記事(トップニュース)が多く、保護者や関係者から好評であるが、部活動での投稿がない部がある。また、本年度より育友会の投稿が組織的に運営され、保護者目線での記事が充実している。 ・SNSのフォロワー数も着々と増え2200人を超える大所帯となり、この時点で目標を達成した。 ・育友会総会の午前に授業公開を行ったところ、参加者が大変に多く盛況であった。予想以上の参加人数になったため、運営面での見直しを行う。 ・中学生体験入学は参加者アンケートをみると好評である。特にチューターによる校内の案内・座談会について前向きな意見が多かった。	B	・HPの部活動記事は生徒募集にも大きく関わるので、顧問への呼びかけを行う。 ・SNSへの積極的な投稿を継続し、本校の様子や魅力をさらに発信する。 ・授業公開においては参加人数が多くなることを想定して計画を練り直す。 ・中学生体験入学はチューター主体のスタイルでの実施が好評なので、来年度も継続する。

【定時制課程】

年度当初					評価結果(9)月		
評価項目	具体的項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
定時制教育のさらなる充実	全ての生徒への安心安全で居心地のよい環境の提供	・授業規律が守られるとともに、生徒の学習到達度に合わせた学習内容となるよう工夫し、ICTを活用する場面を取り入れ、生徒のやる気と集中を促している。 ・生徒会執行部が中心となって運営される各種行事が、学校生活を継続するための生徒の励みになっている。 ・毎日の打合せで生徒の情報を共有し、個々に合った統一感のある迅速で適切な指導につなげている。特性をもつ生徒に対する指導に関しては、まだ工夫の余地がある。	・規律ある学習態度が維持され、生徒は学習の意義や目的を理解し、意欲的に学んでいる。 ・生徒全員が安心安全な環境のもとでルールやマナーを守り、他者を尊重するとともに、授業や学校行事を通して自己の成長を感じられる雰囲気が保たれている。 ・教職員が生徒のことをよく理解し、丁寧に適切な指導がなされることで信頼関係が構築されている。	・授業のユニバーサルデザイン化と分かりやすい教材の工夫、Chromebookを活用した個別最適化された演習等を取り入れ、理解を促す指導を行う。 ・生徒が提案し、主体的に運営する生徒会活動となるよう工夫することで、生徒間の相互理解や連帯感のある集団となるよう努める。 ・生徒個々が抱える問題の解決に必要な支援や指導法について専門機関等と連携を強化するとともに、講師を招いての教職員研修を充実させ、個に応じた支援を行う。	・公開授業週間(8月20日～8月29日)に、Chromebookを活用した授業を行い、相互参観・意見交換を行った。授業の理解の支援や「tokuMo」による個別最適な演習など新たな取組を行い、授業を受けた生徒は、主体的に取り組む場面が増え、学習意欲が高まっている。 ・定通総体において、軟式野球に参加し、選手だけでなく、応援団にも熱が入り、生徒の一体感が高まった。また、夏まつりをはじめ生徒が主体的に取り組む学校行事を実施し、年次を超えた交流の輪が広がっている。 ・月1回倉吉養護学校の先生に授業を見てもらい、アドバイスをいただくとともに、特別支援に係る研修を実施した。	B	・引き続きChromebookを活用した分かりやすい授業を行い、成果や気づきを教員間で共有し、授業改善に生かす。 ・2学期は2年次生が中心となって生徒会行事の企画・運営ができるよう自覚を促しながら、1年次生にも広く呼びかけ、新たな執行部体制による積極的な参画を図る。 ・倉吉養護学校の先生に授業を見てもらうことに加え、外部・医療機関との連携を密にし、個に応じた支援を行う。
	生徒の人間の成長や進路目標達成のための教育活動のさらなる充実	・生徒は授業に真摯に取り組み、生徒会活動や学校行事を肯定的に捉え、進路実現を目指し、学校生活と就労の両立に努めているが、学び直し途上の生徒も多い。 ・生徒は率先して生徒会役員に立候補し、生徒会執行部員は先生方の協力を得ながら各種行事の企画・運営を行っている。 ・各種講演会や校外研修、職場見学・体験等を実施し、生徒の進路意識が高まるよう指導しているが、具体的な進路目標を立てる時期が遅い傾向にある。	・授業に対する生徒の理解度や満足度が高く、それが個々の生徒の学力の伸長につながり、一人一人の希望進路が実現されている。 ・生徒が自己と他者を大切にし、人間的に成長するために、学習活動に加え、生徒会活動や学校行事等に意欲的に取り組んでいる。 ・様々な教育活動や社会体験を通して、生徒が社会で必要とされる力を身につけている。	・学び直しを取り入れながら、生徒が学習内容を理解しているか把握しつつ授業を進めたり、個に応じた学習内容を提供したりすることで、生徒の学習意欲を促し、満足度の高い授業を行う。 ・生徒が主体的かつ意欲的に取り組むことができる生徒会活動とすることで、生徒の自尊感情を育む。 ・各種講演会や校外研修、職場見学・体験の内容を見直し、生徒自身が生き方・在り方を考え、自己実現に向けて具体的な取り組みができるよう工夫する。	・UD化により、見通しを立てやすく、分かりやすい授業を心がけ、学び直しも取り入れながら進めているので、生徒の授業アンケートでは満足度が「概ね」を含めると9割を超えている。 ・3年次生が中心となって学校行事を企画・運営する場面を設けることで、生徒の責任と自覚を促し、意欲的に取り組む生徒が目立つ。また、年次を超えた交流が活発になった。 ・キャリアアップ講演会をはじめとする各種講演会が、自己を振り返り、将来を考えるよい機会となっている。	B	・引き続き分かりやすい授業に加え、Chromebookを活用し、生徒の学習意欲を高める。 ・3年次生から2年次生への生徒会執行部の引継ぎを円滑に行い、学校行事に意欲的に取り組める環境づくりを行う。 ・各種講演会に加え、じげ産業文化探訪等校外研修も実施し、進路意識を高める。

【全日・定時制課程共通】

年度当初					評価結果(9)月		
評価項目	具体的項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
生徒支援の充実と業務改善の取組	環境の変化、ストレス等に対応した生徒への心身両面でのサポート	・様々な課題を抱えて心身のバランスを崩し、登校できない、登校しても教室へ入りづらい生徒が一定数見受けられる。 ・コロナ禍後の学校行事や教育活動の再開により、無理をしてしまう生徒や集団活動の経験の少なさに起因する疲労感・不安を抱えている生徒がいる。 ・学校評価アンケートにおいて「倉吉東高の先生方は信頼できる」が生徒88%、保護者90%、学校評価アンケート(保護者)では「倉吉東高は生徒や保護者の思いをくみ取って教育活動をしている。」が87%と肯定的な評価を受けている。	・生徒が抱えている課題や悩みについて、正確な把握ができ、生徒とともに解決策を考えることができている。 ・教職員が様々な場面で個々の生徒の情報を共有し、外部の機関等ともつながりながら、組織的な支援体制を構築できている。 【学校評価アンケート】「倉吉東高の先生方は信頼できる」「倉吉東高は生徒や保護者の思いをくみ取って教育活動をしている。」ともに90%以上	・生徒や保護者との面接、アンケート調査、hyper-QUなどの検討を通じて生徒の悩みやなりたい姿について理解を深める。 ・教員間の連絡を密にし、必要に応じて医療機関や福祉機関、行政機関と連携を取り、専門家の同席のもと支援会議を開くなどして、具体的な支援計画を策定し、実行と振り返り、改善を行っていく。	・hyper-QUやアンケート調査の結果を教職員間で共有し、生徒との面談に活かすなど有効に活用できている。 ・集団生活に対して疲労感・不安を抱えている生徒に対しては、面談、カウンセリング等の個別対応を行っており、落ち着いた生活を送ることができるようになってきている。その一方で、不安を継続して持ち続けている生徒も見られる。 ・校内支援会議の開催や校外支援機関との連携を定期的に行う他、必要に応じて専門家の同席のもと支援会議を開催し、支援体制の拡充に努めている。	B	・今後も校内支援会議の開催や校外支援機関との連携を定期的に行い、生徒支援の充実にも努める。 ・集団生活に不安を抱えている生徒について今後も支援を続けるとともに、定期的なアンケート、面談等を通して困難を抱える生徒の早期発見を目指す。
	・業務内容の見直し ・長時間勤務者の解消	・令和5年度は、一人当たりの時間外業務は月平均30時間以内となったが、年間の合計が360時間を超える教職員が10名を超えている。 ・時間外の多い9月の業務カイゼンの一定の目途がついた。 ・定時制では、学校行事や校務分掌のバランスが取れており、時間外業務は少ない。	・教職員の月当たりの時間外業務が月平均30時間を超える者が10名以下である。 ・休養日、活動時間を設定した部活動の活動方針が全部活動で徹底できている。 ・校内業務の一層のDX化を図るとともに、改善された9月を含めて業務内容の点検を行っていく。 ・定時制については、引き続き行事と校内業務とのバランスをとっていく。	・時間外業務について、教職員が年間を通しての目標を意識する。また、部活動については、計画と実績報告との間に差異のないようにする。 ・校内業務の一層のDX化を図るとともに、改善された9月を含めて業務内容の点検を行っていく。 ・定時制については、引き続き行事と校内業務とのバランスをとっていく。	・時間外業務の8月末までの月平均時間は、昨年度に比べて増加しており、月平均が30時間以上の教職員も増加している。主な要因は部活動となっている。 ・自動採点システムについては普及しており、多くの教職員が利用している。また、校内情報共有ドキュメントも定着した。 ・定時制では、学校行事や校務分掌のバランスが取れており、時間外業務は少ない。	C	・時間外業務の多い教職員への注意喚起を図るとともに、設定している目標時間の達成を促す。 ・部活動については、計画と実績の確認を毎月行い、計画時点での休休日における休養日の確保と部活動時間の縮減に努める。 ・定時退勤を推奨するために、リフレックス週や帰らーDAYを設置して、定時退勤しやすい雰囲気をつくる。 ・定時制については、時間業務も少なく、今後も同様の取組を継続する。